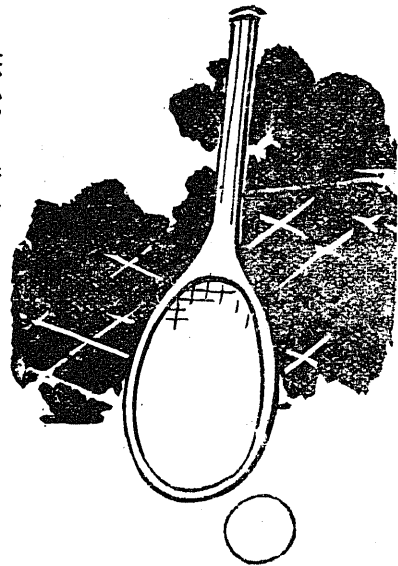


分量も考へ合すべし、こゝに云ふ所は、**園**の醬油を以て分量せしものなり、それより、葛粉カタクリコのときたるを掻めぐらして、其器を左手に持ち、右手に抄子を持って、鍋の底を掻めぐらしながら、左手の器より粉を流し入るゝなり、次に、左手にときたる玉子の器を持って、右の手に目ある金抄子を持って、鍋の上にあてゝ、左右の手を同時にめくらす様にして、右の方へとめくらしながら、左手の器の玉子を右の手の目抄子の上へと少しつゝたえず流し入るゝなり、めくらしかたあしければ、目より多く一所に出てあしゝ、よくめくらすべし、さすれば細く出てよし、次に直に鍋をゑるして、椀にもりて、わさびを上にかきて蓋をして出すべし

貞一の日記

その母



貞一は、明治卅六年五月卅一日午後一時卅分、本郷龍岡町の寓居に生れし、吾家の長男なり、怡其日は舊曆の端午の節句と、日曜日、當りし故曾祖母の君と伯父君は、端午の端句に、男兒出生とは、誠にめでたし、ゾンタッハキンドとはなほさらなど、祝ひよこさる。父にも母にも、親族一同

にも、待設けられしことゝて、幸福なる吾兒は、  
 来る人ごとくに、喜びの詞もて、歡迎せられぬ。其  
 後發育も充分に、これといふ、病もなくて今年や  
 うく、滿一年の誕生日をひかへぬ。其間の養育  
 のわらましを記せば

榮養 生後八ヶ月までは母乳ばかり、九ヶ月の  
 初よりは母乳を一回減じて、玄米の朶もゆ、鯉節  
 のスープ、白米をいりてそれをよく煮出し、ふも  
 ゆ、などをまぜて與ふ、十一ヶ月の初よりは、母  
 乳を二回、減じて白かゆを、すいのでよくこし  
 のりの様にどろくしたるものへ、鶏卵の黄味の  
 半熟をまぜて與ふ、此兒は天性牛乳を嫌ふ者か、  
 種々の手段を、つくして與へても、少しも飲まず  
 鶏卵は大好物なり、哺乳の時間は、正しく守つて  
 時間外には泣いても、乳にて機嫌とらし事なし。

睡眠 初より晝間は、余り眠らず、夜はよくね  
 むる、此頃は晝間午前に一時間位、午後に一時間  
 位、夜は、十時間位眠る。始より母に添寝せし事  
 なし

沐浴 生後五十日間は、毎日産婆湯をつかはす  
 其後は、殆ど毎日、祖母と湯に入る、十一ヶ月の  
 初より、父と始めて洗湯に行く。

種痘 生後六ヶ月に接種す。左右とも、二顆ツ  
 善感

父も母も、晝間大方は外に出づるもの故、細なる  
 發育の模様など一々精密に觀察せん術もなし。生  
 後、凡そ四十日間の觀察、殊更十分ならず。次に  
 四十六日目より、滿一ヶ年の間の發育の狀況の極  
 めて大略を記す。但しとても精密なものにあらす

四十六日目 祖母に抱かれ居りし時、傍なる母の

呼ぶ聲に應じて、首を回らし笑ふ。

五十日目 体重 五、〇四〇

六十日目 ハンモツクにのせられて、よく笑ふ

六十一日目 四五尺離れし所の、赤色の翫具を見

るに頭を前後左右に動かす。

六十五日目 始めて、手を握りて吸ふ。

七十七日目 ウー〜と語る

八十六日目 体重 六、一八〇

八十七日目 風鈴を見て、喜び、ピアノの音をき

ゝつけ其の方向を、たづねる様子あり

九十二日目 身長二尺八寸、胸圍一尺三寸七分、

頭圍一尺四寸四分

九十九日目 新聞をつかみて、口に入れんとす。

百三日目 頭首を真直に保つ

百四日目 瞭然に確に立つ

百廿八日目 体重 七、五〇〇

百六十七日目 八、一〇〇

百九十二日目 八、五〇〇

二百二日目 兩足投げ出して、座る

二百廿日目 バア〜アー〜と語る

二百四十八日目 おもちやの笛を吹く、但し吹か

うと思つて吹きたるにわらず、吐く息に由りて

自ら音を出させたる様なり。

二百五十四日目 ピアノに向はせしに、兩手にて

叩く

二百八十七日目 イヤ〜といへば、頭を左右に

振る

二百九十四日目 下の前齒一枚見ゆ

三百七日目 片膝を立て、ゝ、ゝざる

三百十七日目 四つ這になりて、あとしさをなす。

三百廿日目 下の歯二枚になる、机障子などに、

つかまりて立つ

三百廿三日目 机障子などに、つかまりつたひあ

りあす

三百卅一日目 オイデくを覺ゆ

三百卅二日目 手放しにて立つ

三百四十三日目 上の歯一枚見ゆ

三百五十九日目 萬歳といへば、兩手を高くわぐ

三百六十一日目 上歯二枚になる、オツムテン

くを覺ゆ

滿一ヶ年と十日目 体重 九、七四

一年間、二三回風邪と藤加答兒とにかゝりて、

醫師の診察を受く、其他に著るしき疾病なし。

卅七年五月二十七日 (晴) 朝早く起き、父の枕元に座りて、自轉車のポンプを持ちて遊び居りしが、やがて、ランプを見付けて、這ひ寄りて取らんとす。

食時の時、粥を一皿食べる。

夕食後、父のテーブルの上に座りて戯る、唱歌を歌ひ聞かせれば、しきりに、ムヅカリし故、

ピアノの側に行きて腰を掛ければ、キャツクと言つて喜び、やがて、ベースの所を兩手にて

ジャンくいはせて喜び居りしが、果ては、人の手を押しかけて、己れ一人にて占領せんとす

今日洋服屋來り貞ちやんの夏服を持參せしが、小さくて着られず、失敗つたりとて持ち歸る、

今朝、食事前、父に抱かれて、門に立ち、遙に遠き彼方に烏の二三羽飛ぶを見付け、ヤーク

と云つて、兩手を伸ばして取らんとす。

此頃貞ちゃんの好きなことは、表に出ること、

お湯に入ること、好きな玩具は、お父さんの

自轉車に乗る時のツボンしめ、鏡、お箸母の懐

中時計（玩具の時計は氣に入らず）湯豆腐をす

くふ金の網などなり。

五月卅一日 今日には貞ちゃんの誕生日といふので

本郷のしいちゃんとおつ母さんとお招きして

心許りのお祝ひをなす、しいちゃんは、今年、

尋常の一年生なり、紙の風船を持って来て、貞

ちゃんに呉れるといふ、投げ合をする様な風を

して喜ぶ

六月六日 座つて、菊の花をむしつて遊び居りし

が、やがて、花辨のなくなりしとてか、泣き出

したれば、其代はりにとて、撫子花を興へしも

そをすて、やはり坊主になりし菊の花を離さ

ず、てうち〜といへば、そを片手に持ちなが

らなす、おつむてん〜も同じ。新聞を渡せば

それを持ちながらジャイ〜といつて喜ぶ

六月七日 バーやと座敷の庭に向ひて座つたまゝ、

庭先に置きある乳母車を手にてあちこちに押し

動かして喜ぶ、危きまゝ、脊中のつけ紐をとれば

エー〜といつて、バーヤの手を退けんとす、

又、車に、手を觸れても氣に入らず、獨りにて

動かさんとす。

六月九日 父母に伴はれ、ばあやに負はれ、本郷

の中黒に寫眞をとりに行く、最初、貞一獨芝生

の上に、足投出して、座れる所は、大人しくと

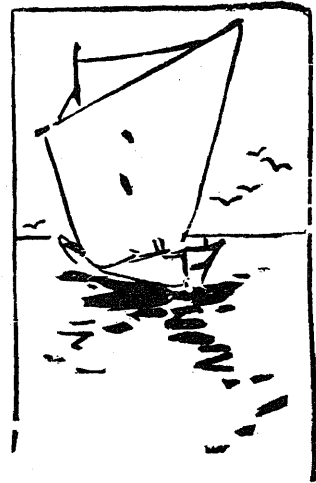
らせしも、父母と三人にて、うつせし方は、中

々あばれて、寫眞師も、持てあませし様子なり

しも、漸くおもちやにて、機嫌をとり、寫しをはる。

六月十日 毎月十日は邸内の金比羅様の縁日なり  
今朝、食事前、いつもの様に、お父さんに抱かれて門を出で、やがて、金比羅様に行きしが、神前の鈴のがらくと鳴るを聞き、不思議そうに上を眺め居りしが、暫らくして、忽ち父に抱き付きぬ、聞きなれざれば、恐ろしと思ひしなるべし。

夕食後、父に抱かれ母と共に金比羅に行く、隣家の三郎も、其母に抱かれて、神樂を見て居たり、貞一の母三郎の傍に行き、三郎を抱かんとて手を出せしを見て、貞一は、聲をあげて泣き出す



決死隊

佐々木信綱作歌

一 天皇と國家とに盡すべく

死地に就かむと希ふ

二千餘人の其中に

七十七士ぞ選ばれし

二

今宵ぞまさに軀を棄て、